

受付番号

留学・研究計画書

氏名 馬場 香織	留学機関名 コレヒオデメヒコ (El Colegio de México) 大学院大学
留学先国名 メキシコ合衆国	留学期間 西暦 2011年9月～2012年8月
研究テーマ 制度的変化後の政策発展:ラテンアメリカ第二世代年金改革	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>本研究が扱うメキシコ、アルゼンチン、ブラジルの三か国では、20世紀初頭以降公的機関による賦課式年金制度が運営されてきたが、1990年代に大規模な改革を経験することになった。改革の焦点は、賦課式の公的システムから個人積み立て式の民営システムへの「民営化」であった。</p> <p>三か国とも年金制度の財政的行き詰まりを受けての改革であったが、実際に行なわれた改革は、各国でかなり異なるものであった。すなわち、メキシコでは年金が完全に民営化されたのに対し、アルゼンチンでは従来の賦課式の公的制度に上乘せする形で個人積み立て式の民営システムが導入され、他方ブラジルでは賦課式の公的制度が維持された上で、その枠内で改革が行なわれたのである。</p> <p>このように、賦課式か個人積み立て式か、という年金制度の抜本的な理念にかかわる改革をめぐって、それぞれ対応が異なった三か国であったが、これらの国の年金改革がたどるその後の道筋も相互に異なるものとなった。メキシコでは2000年以降のPAN政権においても年金制度の民営化政策が継続され、2007年に公務員年金制度の民営化が行なわれたのに対し、アルゼンチンでは90年代に民営化された年金制度が2008年に再国有化された。一方ブラジルでは、2003年に公務員年金制度改革が行なわれたが、それは90年代の改革と同様に公的制度の枠組みの範囲内で施行されたものであった。</p> <p>本研究では、大きな制度的変化が起こった後の政策はどのように展開していくのか、という問題関心の下、メキシコの公務員年金制度民営化、アルゼンチンの年金制度再国有化、およびブラジルの公務員年金制度改革を、各国の1990年代の年金改革(第一世代改革)と対比して「第二世代改革」と呼び、なぜ第二世代改革が起こったのか、そして第二世代改革における各国間の相違はどのような要因によるものか、を明らかにすることを目指す。現段階での仮説は、長期的構造要因(党派対立の構造、テクノクラートの役割、政労関係)と短期的な年金政策に直接関わる要因(財政・経済政策における政府のネオリベラル・イデオロギー、90年代の年金改革のタイプ、年金は公的であるべきという社会的規範意識)から各国の第二世代改革の相違を説明するものである。その際に本研究は、90年代の改革の政治的遺制が改革の「その後」に与えたインパクトに特に焦点を当てる。</p> <p>本研究の学術的意義として、第一に、国内外でまだ研究の少ない第二世代年金改革について、ラ米地域研究の蓄積に資する点がある。第二に、大きな制度的変化が起こった後に何が起こるか、という地域を超えたより普遍的な問題について、広く比較政治における理論的貢献が期待できる。</p> <p>社会的な意義としては、第一に、上記3カ国の詳細な比較・検討によって、年金制度加入率の低さや、多くの年金受給者が直面している困窮した生活状況といった、ラ米諸国に共通する諸問題への対応策を模索するきっかけとなりうる点をあげることができるだろう。第二に、研究対象国の人々の生活に直結している年金制度について、日本人である申請者が研究することは、これらの国と日本の相互理解を深めることにもつながるのではないかと考えている。</p>	

成果報告書

記入日 2012年 10月 27日

氏名 馬場 香織	留学先国名 メキシコ	所属機関 東京大学大学院法学政治学研究科
研究テーマ： 制度的変化後の政策発展:ラテンアメリカ第二世代年金改革		
留学期間： 2011年 9月 ~ 2012年 8月		
<p>このたび、貴財団の奨学生として1年間のメキシコ留学を経て帰国しました。本成果報告書では、はじめに1年間の活動の概略を述べ、続いて具体的な研究成果についてご報告した上で、最後に留学生生活全体を通しての感想をお伝えさせていただきます。</p> <p>今回の留学の主たる目的は、博士論文のテーマであるラテンアメリカにおける近年の年金制度改革について、メキシコの実地調査を行なうことでありました。1年の留学期間のうち前半は、実地調査を行なう前段階としての博士論文の分析枠組みの確定、そして後半は、分析枠組みに基づくメキシコでの実地調査を実施しました。前半の作業では、留学受け入れ研究機関であるメキシコ大学院大学の図書館にて、関連する先行研究の検討を行ないました。後半に行なった実地調査では、メキシコ労働総同盟およびメキシコ社会保険公社職員労働組合の皆さんにご協力いただきながら、メキシコの公的社会保障組織、官公庁、関連労組の内部の一次資料の渉猟、および、関係者へのインタビューを実施しました。なお、7月には3週間ほど、同じ博士論文で検討するメキシコ以外の二か国であるアルゼンチンとウルグアイへ、不足していた資料を補うことを目的に渡航しました。</p> <p>前半の主な成果は、第一に、論文の分析枠組みをこの時点である程度確定することができたことです。この作業がほぼ予定通りに2012年1月半ばに完了したため、その後の実地調査を効率よく行なうことができたのではないかと考えております。分析枠組みの構築の過程で、主要な先行研究のうちの一つについて、書評を執筆しました。この書評は、査読を通過し、2012年6月刊行の日本ラテンアメリカ学会の年報に掲載されました（馬場香織. 2012. 「<書評> Sebastián Etchemendy. <i>Models of Economic Liberalization. Business, Workers, and Compensation in Latin America, Spain, and Portugal</i> (Cambridge: Cambridge University Press, 2011)」日本ラテンアメリカ学会編『ラテンアメリカ研究年報』第32号）。この書評をはじめとする先行研究の検討を経て、2012年1月からは博士論文の執筆を開始しました。これ以降は、論文執筆と並行してメキシコでの実地調査を行ないました。</p> <p>留学後半の主な活動内容は、論文のための一次資料の渉猟となりました。先にも述べた通り、これは主に、関連組織内部の文書資料と、関係者へのインタビューからなります。特に、論文のテーマである年金制度をめぐる政治過程をみる上で重要な、関連労組の資料収集に力を入れました。</p>		

この点での成果も大きなものであったと自負しております。特に、労組内部の資料を詳細に検討することで、これまでの研究で不当に過小な評価を受けていた改革（2005年のメキシコ社会保険公社職員労働協約に基づく年金制度の改変）の歴史的な意味を再評価し、加えて、その政策決定過程の秘密性ゆえに、単なる事実関係すらも一般に知られていなかった2007-2008年の改革（メキシコ社会保険公社職員年金制度の民営化）を本研究の枠組みから説明したことは、メキシコの社会保障政策を論じる国内外の研究上の位置づけを考えると、画期的なことといえます。また、積極的に関係者へのインタビューを行なったことで、ある一つの現象についてさまざまな立場の人の意見から多角的に見直すことができたことは、その現象のより深い理解へとつながりました。ラテンアメリカの近年の年金制度改革を扱う研究で、こうしたインタビューを基にした類似のものは、私見ではこれまでになく、その意味でも本研究には面白さや新しさを見いだすことが可能ではないかと考えております。

以上の研究活動に加えて、帰国間際の7月には、比較研究のメキシコ以外の対象国であるアルゼンチンとウルグアイに、資料収集に赴きました。厳密には留学先と異なる国での活動ですが、これも貴財団からの助成があったから可能となったものなので、簡略的にその内容を述べさせていただきます。全体で3週間の滞在のうち、2週間はブエノスアイレス、1週間はモンテビデオで資料収集を行ないました。いずれの国でも、関連する公的社会保障組織や労組の一次資料の検討や、関係者へのインタビューを実施しました。短期の調査に由来する難しさはありましたが、不足していた一次資料の補充という目的を達することができ、有意義な訪問となったと考えています。

以上の研究活動を経て帰国した現在、目下調査結果を博士論文にまとめる作業を進めております。今回の実地調査で得られた資料の重要性は大きく、2012年10月現在論文の8割方を執筆済みの段階で、2012年9月および10月に、同論文の内容について研究会報告を行ないました。([1]馬場香織「ラテンアメリカにおける年金制度『再改革』：第一世代改革の経路とその刻印を中心に」「中東欧とラテンアメリカのいまを比較する」第9回研究会、2012年9月29日、於京都大学。[2]馬場香織「制度的変化後の制度発展—ラテンアメリカ年金制度『再改革』比較研究」東京大学政治史研究会・比較現代政治研究会、2012年10月27日、於東京大学法学部。)2012年度中には東京大学大学院法学政治学研究科に博士論文を提出できるよう、論文の完成に向けて邁進いたします。

最後に、留学生活全般の感想について述べます。メキシコ留学は私にとっては初めてではなく、今回が3回目の長期留学となりましたが、毎回新たな出逢いと感動があります。このたびの留学生活で得た数多くのことの中でも、私がもっともその価値を重視しているのが、人とのつながりです。今回実施した実地調査は、現地の多くの方々のご協力なしには到底実現し得なかったものでした。インタビューを申し込んでも、さまざまな理由から承諾していただけるのはほんの一部の方ですが、中には極東からメキシコの社会保障制度を勉強しにやってきた学生に興味をもって親身にご協力くださる方もいて、そういった出逢いの積み重ねで研究の遂行が可能となりました。特にメキシコ労働総同盟とメキシコ社会保険公社職員労働組合のみなさんには、本当にお世話になりました。ここで生まれた個人的なつながりは、研究活動の外でも続いていて、今後も大事にしていきたいと思っています。

関連しますが第二に、私はこれまで、時代的には比較的最近のラテンアメリカ政治を研究の対象としてきました。私が研究の中でもっとも気をつけていることの一つは、実際にラテンアメリカの「いま」を生きる人たちとの交流を通じて、書物からだけでは十分に感じ取ることのできない時代の雰囲気を実感として体験し、それを大事にする、ということです。今回はちょうど六年に一回の大統領選挙の年に当たったこともあり、メキシコのアクチュアルな政治を捉える上で非常に重要な現象を目撃することが可能となりました。そのうちの 하나가、2012年5月から7月にかけて都市部を中心に盛り上がりを見せた、メディアの独占に反対する学生中心の抗議運動です。1968年以来の学生運動といわれたこの現象は、選挙民主主義を一応達成したメキシコの「民主主義」を考える上で、さまざまな示唆を与えてくれました。

情報化の進んだ今日、海外にいながら各国のデータ等を入手することは、比較的容易な世の中となりました。これが政治学の発展により影響を与えてきた側面も間違いありませんが、その一方で、各国の政治的・社会的文脈を軽視することにつながる恐れも十分にあると思います。そんな中で、今回松下国際スカラシップ奨学生としてメキシコに滞在できたことは、地域研究者としての原点に立ち返り、政治学の面白さと地域の面白さの両方のバランス感覚を精鋭化させていく上で、非常によい機会となりました。

以上のように、今回のメキシコ留学は、論文の進展という研究への直接的な成果をもたらしてくれただけでなく、長期的に研究者としての自身を確立していく上でも非常に有意義な機会となりました。こうした機会を与えてくださった貴財団のご寛容なお取り計らいに改めて深い感謝を申し上げますとともに、今後も松下国際スカラシップOGとして恥ずかしくない研究者を目指し、精進を重ねていきたい所存です。

最後に写真を3枚添付します。

(1) メキシコの民主主義の試み「こども選挙」の様子



(2) メキシコシティ中心部における 2012 年 5 月の学生運動の様子



(3) メキシコ国旗の前で友人たちと

